The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代ハンガリー語の民衆化 : 活動する言語媒体としての詩人ペテーフィを考える
Author(s)	岡本, 真理
Citation	大阪外国語大学論集. 2005, 31, p. 145-165
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79951
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学論集第31号（2005年）

近代ハンガリー語の民衆化
—活動する言語媒体としての詩人ペテーフィを考える—

岡　本　真　理

Popularizing Process of the Modern Hungarian Language
— The Poet Petőfi as an Acting Linguistic Medium —

OKAMOTO Mari

Hungarian as a modern language is considered to have been formed during the Enlightenment and Reformation ages, at the time when the Habsburg monarchy was passing through great political changes, both progressive and reactionary ones. By the time of the 1848 revolution the former peasant language had been enriched by works of Enlightenment and Romantic literature, and through a number of new literary and political periodicals, theaters, as well as linguistic movements such as word-making, orthography and the publication of dictionaries. It should be noted, however, that all these achievements would not have been possible without the growing bourgeoisie who began to enjoy the benefits of educational, financial, and to a lesser extent, political freedom.

In this paper I have used the great Hungarian romantic poet Sándor Petőfi (1823－49), primarily as an example of a medium of the modern Hungarian language. Petőfi was not a poet of meditation, but travelled around all the corners of the country, met people of all social classes, appeared on stage, edited newspapers, and fought for the freedom of the Hungarian people. He did all this along with composing hundreds of romantic and folk-tale-like poems, the natural and simple language of which totally fascinated the people of his age. He brought the classic and aristocratic language of the Enlightenment down to the level of the people, not only by his poetry but also by acting as a medium between literature and the people. Petőfi is thus a symbolic figure, who symbolizes the attainment of the popularizing process of the modern Hungarian language.

0.　はじめに
1.　ハプスブルグの啓蒙絶対主義
1.1 ハプスブルグの教育政策
1.2 啓蒙かドイツ化か——1784年言語令
2.　啓蒙期から改革期へ——ハンガリーの変化

2.1 ハンガリーにおける教育の普及
2.2 民主化か同化か――1844年言語法
3. 学生サークル
3.1 学生サークルの普及
3.2 ペテーフィと学生サークル
4. 演劇の民衆化
4.1 近代ハンガリー語演劇のはじまり
4.2 ペテーフィと演劇
5. 出版の民衆化
5.1 改革期の新聞雑誌
5.2 ペテーフィと新聞
6. まとめ

0. はじめに

本論では，近代ハンガリー，特にいわゆる啓蒙期（18世紀末）から改革期（1830年以降1848年革命まで）にかけての民族言語運動のダイナミズムを，「民衆化(népiesedés)」という観点から考えてみたい。[1]

まずは，文学における「民衆化」とは何かを明らかにしておこう。啓蒙主義の思想家ヘルダーによる民族の発見と再評価は，ハンガリー文学に大きな影響を与え，それは早くも啓蒙初期の文学者らによって，ロココ風牧歌から民謡や方言への関心にいたるまで，さまざまな試みとなって現われた。農民のことばを追いかけ，そこに美しく豊かなハンガリー世界を探すことは，こうしてロマン期文学の目標の1つとなった。しかし，こうして「民衆化」した文学はあくまで農民世界そのものではなく，文学とその読者が農民との接点として作り上げるものであり，いわば文学と生の民衆詩（népköltészet）のあいだの「ろ過装置」である。啓蒙期の文学・言語運動における指導者的存在であったカジンツィはあくまで西欧的で高貴な文学をめざし，ヘルダーや民衆の世界にたいしては，博学の教養人がもつ関心の程度にとどまっていた。その後，ロマン期の詩人や劇作家らが農民のことばへの思い入れを創作に反映しはじめ，いよいよペテーフィやアラニュにいたって民衆詩そのものを創作する時代が完成する。[2]

本論であつかう近代ハンガリー語の「民衆化」はしかし，上述の文学における「農民世界の追求と体現」という限定された意味ではない。「優雅で洗練された知性あふれることば」を追求した啓蒙期の言語改革者カジンツィをはじめとする知識人らは，それまで日常の話しことばに使用範囲を限定されていたハンガリー語を，短期間で膨大な新語創作や文体の改良を行うことによって，近代的思想や学問，政治の表現手段として耐えうることばへ鍛え上げた。こうして生まれた近代ハンガリー語は，初期の段階では貴族知識層のみが使用享受する人為的な規範言語であった。しかし，そのように本来的に限定された近代ハ

ンガリー語は，やがて19世紀前半のロマン派作家らを中心にして語彙や文法および正書法が整理し確立される中で普及・定着し，それは近代社会の成長とともに日常的言語活動のあらゆる面に，また社会のより広い層の人々に浸透していく。さらに19世紀半ばのペテーフィやアラニュによる民衆詩的文学は，「貴族的」な初期近代ハンガリー語に庶民のことばを吹き込み，より簡素で民俗的な文体に特徴づけられる言語へと変化させた。[3]

近代ハンガリー語普及における上記の過程を本論では「民衆化」と定義し，その中のもっともめざましい現象として詩人ペテーフィ・シャーンドル（Petőfi Sándor, 1823－49）の活動に着目したい。かれは大平原の町に貧しい肉屋の子として生まれ，社会の近代化とハンガリー・ナショナリズムが平行して発展する改革期に，その空気を吸って育った詩人である。そして，その短い生涯を数百編の詩作にささげただけでなく，若さと貧困が生む独特の情熱と急進性を携えて社会を駆け回り，人々の心をとらえ，時代を創った人でもあった。たえず活動するペテーフィは，それ自身が多面性をもった言語媒体であり，ペンだけでなく生身の体でハンガリー語の民衆化を押し進めた存在といえる。

本論では，ペテーフィが特に深くかかわった活動分野として，学生サークルと演劇および出版の3つをとりあげる。これらは近代前半にめざましく発達し，近代的市民社会の成長の中でより広い社会層へと影響を及ぼした。そこにおけるペテーフィの活動軌跡をたどることで，近代ハンガリー語が「民衆化」していく過程でペテーフィがどのような位置づけがされうるのかを検証していきたい。

1．ハプスブルグの啓蒙絶対主義

近代ハンガリーの言語運動とハプスブルグの啓蒙主義的動きは不可分の関係にある。帝国全体がどのように変化する中でハンガリーの啓蒙期が訪れたのかを，マリア・テレジアおよびヨーゼフ2世の2人の啓蒙的専制君主を通して考えておこう。

18世紀半ばにはじまるハプスブルグ帝国の近代化は，そもそもマリア・テレジアの帝位就任直後に，プロイセンによって仕掛けられたオーストリア継承戦争の経験が引き金になったといわれる。早くから近代化に乗り出し成功したプロイセンの圧倒的な軍事力を見せつけられ，帝位に就いたばかりの女帝は長く苦しい戦いの末に敗北し，領土を失った。帝国の後進性はもはや無視できなかった。改革は，領邦の寄せ集めで膨張してきた帝国を，強力な中央集権国家に鍛えなおすことを目的とした。軍事・行政機構の合理化，効率化を図り，中央から地方のすみずみにわたる指揮系統を確立することが，改革の最重要課題だった。しかし，帝国の近代化は，官僚組織の強化や軍事面，産業技術面の近代化といったハード面に終わらず，それと並んで国民への教育の普及や文化活動の推進といったソフト面の改革も重要視され，実現されていった。つまり，強力な近代的国家へ成長するためには，その構成員である国民の精神的啓蒙が不可欠であると考えたのである。ここに女帝とその長男ヨーゼフ2世が「啓蒙的」専制君主と称される理由があり，この時代がハプスブルグの政治経済史にかぎらず，中東欧諸民族の文化史や文学史，そして言語史にとっても重要な時代となる理由がある。徴兵制と税制の確立，省庁の抜本的改革，農奴制

の廃止，農業や手工業の技術改革，都市インフラの整備などに並んで，教育制度，出版活動，劇場などの大衆的娯楽といった分野でも大きな改革の時代であった。[4]

ただ，2人の改革は一貫性をもって継承されたわけではなく，改革の根本となる思想も実現の手段も異なっていたことが指摘されている。カトリックの敬虔な信仰を国家改革の基本信条に据え，国民生活の向上のための現実的な政治改革を進めた母にたいし，息子は啓蒙主義思想を純粋に体現するべく，狂信的ともいえる熱意と妥協のない専制的手段をもって改革にひた走った。そのため，彼の死後1790年代はじめには，大きな反発と混乱を招いた事態を収拾するために，次の皇帝レオポルド2世によって多くの「行き過ぎた改革」が取り下げられることとなった。[5]

啓蒙期ハプスブルグの文化政策は，ハンガリーにおいてもその言語運動を誘発，牽引する素地を養った。ここでは，言語問題に直接関係する政策として，啓蒙期の教育改革と言語法について概観しておこう。

1.1 ハプスブルグの教育政策

近代的な中央集権国家を実現させる新しい教育政策は，教育を国家が取り組むべき重要な福祉政策ととらえた。国家が国民1人ひとりに教育を与えることで，国家に忠実に奉仕する国民の総体を作り上げることを目指したのである。重要な柱となったのは，1つは帝国全土への初等教育の普及を図り，国民に読み書き計算の基本的な能力をつけさせること，もう1つはそれまで教会の所有であった教育機関を国家の管理下へ移すことであった。

マリア・テレジアは，はじめて帝国全土における初等教育の義務化，それも母語による教育を実現した。子どもが百人を超える地域には学校を建設すること，性別・身分・宗教に関係なく7歳から13歳までの子どもすべてが学校に通う権利を有することが謳われた。最重要とされた初等教育は，子どもたちがもっともよく理解し，日常的に話す母語で行われるとされ，それ以外にドイツ語とラテン語も教えられた。中等教育（ギムナジウム）以上では教育言語はラテン語であった。この時期非常に多くの学校が建てられ，ドイツ・オーストリア地域では就学率が29%に至ったという。これはヨーロッパ全体で見ても非常に高い水準であり，改革は実際驚くべき成果をあげたといえる。[6]もっとも，教育の普及が帝国全土で同じように成功したわけではない。広大な領土を抱える帝国のすみずみまで改革の徹底を行うのは不可能に近く，改革が進んだオーストリア地域にたいしてハンガリーは遅れをとり，その他の辺境地域に至っては，まさに比較にならなかった。[7]

教育の管理という点では，従来は教育は教会の役割であり，宗派ごとに厳格に分かれて学校を運営していた。初等教育は，その地域の庶民層の子どもたちに読み書き算数の基本的な知識を与えると同時に，教会の熱心でまじめな信者に育成することを目的としていたのである。[8]新しい政策では，宗派単位の学校制度は残るものの，全小学校に共通のカリキュラムと教科書が導入された。また，主にカトリック教会の所有であった高等教育機関も教会から分離され，国家が直接に管理するようになった。大学はもはやカトリック教会

の神学を学ぶ場ではなく，国家中央官庁に必要な実務能力に秀でた官吏の養成機関となったのである。カトリック教会の中心都市ナジソンバト（現在スロヴァキアのトルナヴァ）にあったハンガリー国内唯一の大学が1777年にブダへ，その後1784年にペシュトに移転したことは，高等教育を教会（イエズス会）から国家の手へと委譲させた典型的な例だといえるだろう。[9]

1.2 啓蒙かドイツ化か——1784年言語令

1780年に女帝が没し，ヨーゼフの単独統治の10年がはじまると，改革はにわかに急進的な性格を呈する。その中で，特に帝国内諸民族の大反発をくらったのが，1784年の言語令発布によるドイツ語の公用語化である。これは，ほぼ帝国全土でラテン語に代わり，ドイツ語を行政，司法，また中等以上の学校教育における唯一の公用語に定めたものである。この政策は，スラブ諸民族よりも，特にハンガリー貴族らによる激烈な反対にさらされた。[10]

しかし最近の研究では，この試みはヨーゼフによるドイツ・ナショナリズムの強制と考えるよりも，あくまで彼の合理的啓蒙主義的改革の一環であったという指摘がある。帝国内の近代化・効率化を図るためには，ラテン語に代わり，生きた言語，しかも皆が相互に理解できる言語を公用語にしなければならない。実際，ヨーゼフ2世のプラグマティズムは，帝国内スラブ民族が過半数を占めているという理由で，スラブ語のいずれかを公用語にすることも真剣に検討するところまでいきついたという。しかし，実際のところ，万人が理解するスラブ語は存在しないし，もうひとつの選択肢ともいえるハンガリー語も皆が理解するわけではない。このような理由で，近代国家にふさわしい公用語はドイツ語以外にありえないと結論づけられたという。[11] しかし，たとえ合理主義の理念に基づいていたとしても，人々の目には強硬なドイツ化政策としか映らないこの言語令は，諸民族の民族主義的感情を刺激し，帝国統治にとって不安材料となる役割を果たしたにすぎない。1784年に導入されたドイツ語公用語は，ヨーゼフの死後ただちに取り消され，もとのラテン語に戻っている。

1790年から2年間にわたってヨーゼフ主義改革の「後始末」をしたレオポルド2世は，しかしながらまだその精神において啓蒙主義的君主であり，走りすぎた改革をいったん出発点に戻し，ふたたびテンポを取り戻して改革を達成させるつもりであった。しかし，彼の予期せぬ早期の死とともに，急速に反動化が進むこととなる。フランツ皇帝の長い保守時代のはじまりである。それは，1795年に起こるハンガリー貴族らによる反ハプスブルグ運動，いわゆるマルティノヴィチ事件にたいする政府の厳しい制裁によって本格化する。

2．啓蒙期から改革期へ——ハンガリーの変化

先に概観したハプスブルグ帝国の啓蒙絶対主義，そしてそれに続いた反動・保守化の政策は，ハンガリーの言語文化の状況にどのようなうねりを与えただろうか。また，啓蒙期に生まれたハンガリーの民族復興運動は，改革期を経て1848年革命に至るまで，どのよう

な紆余曲折を経て発展していったのだろうか。以下ではまず，ハプスブルグの啓蒙的な文化政策がハンガリーの言語生活に及ぼした影響を，ふたたび教育を中心にみてみよう。

2.1 ハンガリーにおける教育の普及

マリア・テレジアは，1777年にハンガリー国内の教育改革を指定した「教育大綱（Ratio Educationis）」を発布した。これにより，ハンガリーでも母語による初等義務教育が推進されていくことになる。1806年の教育大綱改正では，小学校6年制義務教育に違反した場合の保護者の罰則規定を設けるとともに，小学校終了後に行われる6年制ギムナジウムの教育も制度化された。これにより，19世紀前半には大量のギムナジウムも設立されている。[12] この第2次教育大綱では，第1次で謳われた庶民の生活向上に役立つ実践的教育が影を潜め，ラテン語や修辞法といった古典的な教育が重視されている。しかし，民族主義が抑圧された時代であったとはいえ，ゆっくりとした歩みで民族言語教育は広まりつつあった。ギムナジウムではラテン語に平行してハンガリー語教育も徐々に導入され，1820年からは就学者全員がハンガリー語の終了単位を得ている。[13] また1791年にすでにハンガリー語学科が設立された大学は，やがて4つの学部（哲学，神学，法学，医学）をもつ総合大学に成長し，1840年代には1500人の学生が学んでいた。[14] 中高等教育の場においてもこのようにハンガリー語教育の基盤はゆっくりとできつつあった。その一方で，各地の学校に文芸サークルや集会といった学生の自主的な組織も生まれた。これについては次章でくわしくとりあげるが，これらの動きが改革期の民族主義の高揚に寄与するところは大きかった。

また，教育問題以外にも，この時代を特徴づける大きな出来事として，アカデミーの設立を忘れることはできない。18世紀末以来，啓蒙主義的知識人らが夢見つづけ，何人もがその構想を発表してきたハンガリーのアカデミーは，1825年に上院議員でハンガリー随一の大貴族であるセーチェーニ（Széchenyi István）がみずから一年分の収入をつぎ込んで「ハンガリー学者協会（Magyar Tudós Társaság）」の名称で実現するに至った。1832年には「ハンガリー科学アカデミー（Magyar Tudományos Akadémia）」と名称を変更し，今日に至るまでハンガリーにおけるあらゆる学問分野の拠点となっている。しかし，元来のアカデミー設立の目的は，ハンガリー語の育成と向上であり，それは，改革期に詩人ヴェレシュマルティ（Vörösmarty Mihály）らの努力によってさまざまな辞書，文法書の類が発行され，正書法が整備されるという成果を見た。[15]

2.2 民主化か同化か——1844年言語法[16]

改革の機運が熟したハンガリーで，民族主義運動の象徴ともなったのが，1844年の言語法である。ハンガリー議会が可決したこの法律は，ハンガリー国内の公用語をハンガリー語のみと定めるもので，これによってハンガリー国内の立法，行政，教育（ギムナジウム以上の中高等教育でも），宗教など生活のあらゆる面で，ラテン語やドイツ語に代わってハンガリー語が浸透していくこととなる。近代ハンガリー語の発展という観点からみれば，たしかにこの法律はハンガリー語の権利をかつてないほど拡大し，その使用域を格段に広

げた。社会のあらゆる面で保障され使用される言語は，話者の数だけでなく語彙や表現をも一気に増大させ，近代的な言語へと成長する。

しかし，そもそもハンガリー国内にはスロヴァキア人・クロアチア人・セルビア人などのスラブ民族やルーマニア人など多くの民族が居住し，民族構成においてハンガリー人は半分にも満たなかった。それにもかかわらずハンガリー全土で強硬なハンガリー化政策がとられたことは，当然のことながら諸民族のハンガリー人にたいする強い憎悪を生み，かれらの民族意識をいっそう刺激する結果を招く。ハンガリーの貴族政治家らが目指したものは，少数民族を含めた「歴史的ハンガリー」の独立であり，したがってスラブ人なども含めた全国民がハンガリー語のみを使う国民国家となることであった。その国民国家とは，ハプスブルグと違い，近代的で民主的な市民の自由を保障した国家であるので，すべての国民をハンガリー化することは幸福なことだとかれらは考えたのである。こうして急進派のコッシュートはハンガリー化を強制しようとしたし，穏健派のセーチェーニでさえ強制には反対するものの，ハンガリー民族への自発的な同化によって他民族の幸福の追求が実現できると考えていた。[17] ただ注意しておきたいのは，「ハンガリー化＝民主化」ともいうべき無邪気かつ危険なこの発想は，改革期の進歩的政治家らに唐突に現われたのではないということである。ボドライは，法制化といった強権的な手段に至りはしないものの，その発想の根源はすでに啓蒙期に見て取れると指摘している。最も代表的な啓蒙的知識人らもまた，ハンガリーの少数民族たちはいずれみなハンガリー化されるのが望ましいと考えていたし，ハンガリー議会も当時，ハンガリー人はさておき，少数民族の子弟が通うギムナジウムにハンガリー語教育を導入するべきだと主張している。[18] ハンガリー人とスラブ人のあいだの歴史的軋轢は，やがて1848年革命の敗北の誘因ともなり，ハンガリー民族が痛いしっぺ返しをくらうことにもなるのであるが，この問題を啓蒙期からの連続性という観点から掘り下げるのが今後の課題となるだろう。

以下の各章では，啓蒙期から改革期にかけて民衆化するハンガリー語の諸相を，学生サークルの活動，演劇活動，そして新聞雑誌という3点をとりあげて検討する。そして詩人ペテーフィが，言語を最重要な手段とするこれらの活動の中で果たした役割について，かれの行動を追いながら明らかにしていこう。

3．学生サークル

近代ハンガリー語の運動に重要な役目を果たした媒体の1つに，学生サークルがある。文学的交流を支える全国的な中心地というものが存在しなかった啓蒙初期，大貴族が私有する蔵書を一般に開放した図書館[19]や貴族の文学サロン，知識人らの書簡のやりとりなどが，人的交流の代表的な場であった。しかし，これらは各地に散在し，強い求心力と社会に広く発信する勢いをもつ文学活動の拠点にはなりえなかった。それには19世紀に入ってまもなく，大きく成長をはじめる近代都市ペシュトを待たねばならない。またベッシェニェイ（Bessenyei György）やレーヴァイ（Révai Miklós）といった文人らが，ヨーゼフ期の自由な雰囲気の中で，ハンガリー語を育成し発展させるための国民的な学術機関の設立

について提唱し，構想を発表してきたが，この実現もまた，機が熟す改革期を待つしかなかった。そのような中，これらの理念の実現を自負して国内各地に現われたのが，学生サークルであった。

3.1 学生サークルの普及

学生サークルは，ほとんどの場合が中等教育（ギムナジウム，リセ）を活動の場とし，学校の教師と学生らで結成された。もっとも早く現れた学生サークルは，オーストリア国境にほど近い町ショプロンのルター派ギムナジウムのサークルで，1790年のことであった。ほぼ同じ時期に西部ハンガリーではポジョニ(現スロヴァキアの首都ブラチスラヴァ)やコマーロム，東部ではシャーロシュパタクや上部ハンガリーのカッシャ（現スロヴァキアのコシツェ)，またトランシルヴァニアではナジエニェド（現ルーマニアのアイウド)，やセベン（同シビウ）のギムナジウムでも次々とサークルが誕生している。また，ペシュトに移転してまもない大学でもサークルが立ち上げられたが，初期には主にこれら各地のルター派ギムナジウムで活動がはぐくまれた。改革期になって，シャーロシュパタクやデブレツェン，トランシルヴァニアではコロジュヴァール(現ルーマニアのクルージ)といった都市のカルヴィン派ギムナジウムでも活発化した。これにたいして，カトリックや王立(国立）の学校では活動はあまり盛り上がらなかった。そこでは教師が指導する「ハンガリー語の授業」の域を出ず，学生たちの自主的な活動の場にはなりにくかったようである。

サークルの活動は，学生たちによる詩や散文の朗読，自作の詩の発表，相互の批評，ハンガリー語育成にかんする議論や論文の発表，またハンガリー語による劇作品の上演など，多岐にわたるものであった。中高等学校の教育言語がラテン語であり，ハンガリー語の導入がなかなか進まないこの時代，学生サークルの活動は学校で母語発展に取り組める唯一の場であったといえる。サークルの活動は学内のメンバーにととどまらず，知識人や町の人々の関心を集めた。また各地の学校間でサークルの交流も活発であったといわれる。集会にはしばしば著名な詩人が招待され，雑誌や新聞はサークルの開催通知や会合の報告・批評を定期的かつ詳細に掲載した。初期には，『総論集(Mindenes Gyűjtemény)』やヴェレシュマルティが編集する『学術文集（Tudományos Gyűjtemény)』といった熱心な文学雑誌が，また30年代に入ると改革期を代表する政治紙『現代(Jelenkor)』が，そして40年代に入ると『生活図絵（Életképek)』などの流行紙が主となって，各地の学生サークルの活動を積極的に伝えた。[20]

しかし，出版やその他の文化活動と同様，学生らの活動もやはり政治の変動にさらされ，浮き沈みする。マルティノヴィチ事件後には政府の取り締まり強化により，上述のサークルはすべて廃止に追い込まれ，残ったのはわずかにショプロンのサークルのみであった。しかしその後，状況が徐々に緩和されると，教育制度の改革によりギムナジウムが増大したこともあり，1820年代には上部ハンガリーのシェルメツ(現スロヴァキアのバンスカー・シュティアヴニツァ）やエペリエシュ（同プレショフ）をはじめ，多くのサークルが生まれる。30年代になると，それまで純粋に言語問題のみを扱ってきたサークルが徐々に社会

の改革やハンガリー民族の要求といった政治問題にかかわるようになり，それを理由に政府はふたたび活動を制限，やがて禁止するようになった。最初にウィーン体制が直接に及ぶトランシルヴァニアで，まもなく続いてハンガリー国内で学生サークルの活動が抑圧された。しかし，すでに改革を求める社会全体の気運が高まりつつあったこの時期，活動を根絶させることはできなかった。そればかりか，48年に至るまで学生サークルは間接的に若者の革命の拠点であり続けたといえる。革命の先頭に立ったペテーフィや12項目の要求の草案を書き上げたヨーカイ（Jókai Mór）ら文学史に名を残した者だけでなく，当時ペシュトの大学でサークルのメンバーであった者全員が革命に参加したこと，各地のギムナジウムでメンバーとして活躍した若者の大勢が革命や自由戦争に武器を持って参加し，その後のハンガリー政府樹立に関与したことなどが，それを証明しているといえるだろう。[21]

3.2　ペテーフィと学生サークル

ペテーフィの学生サークルとのかかわりには2つあった。1つには，かれ自身がギムナジウムの生徒として在籍中，サークルのメンバーとなったことである。1838〜39年にはシェルメツのルター派ギムナジウム，1841〜42年には西部ハンガリーのパーパのギムナジウムに在籍し，その間短いもののサークルの主要なメンバーとして活躍している。パーパでは，後にペテーフィにとって生涯のよき友となり，19世紀最大の人気を誇る長編小説作家となるヨーカイとともにサークルの設立に奮闘したことは，よく知られたエピソードである。また，学校を退学してからも，パーパではその後も名誉会員として名を残している。

もう1つは詩人としてのかかわりである。ペテーフィは各地の学生サークルの会合に招待されたり，また旅の途中に自ら立ち寄ったりしている。自作の詩を聴衆の前で朗読して人々の心を捉えたことも多かったという。1843年にはショプロンとペシュトのサークルで，その後もパーパをはじめ全国のサークルで朗読を続けた。ほどなくして詩人として大成功を収めたにもかかわらず，都会ペシュトで安定した生計を立てることができずにいたかれは，一時的な仕事で食いつないだり，新聞と契約してたくさんの詩を書き続けた。しかし，出版者や編集者とのトラブルから仕事が頓挫すると，かれは都会を離れて旅に出るのだった。そのような時，国中の学生サークルを訪れ，ギムナジウムの熱心な教師たちや自分より若い学生らと交友関係を温めた。また上部ハンガリーではトンパ（Tompa Mihály）やカジンツィ・ガーボル（Kazinczy Gábor, カジンツィ・フェレンツの甥）といった若い自由主義的な詩人たちと知り合い，革命世代の文学サークルの構想を共有する。かれの積極的な行動は，ハンガリー中のルター派ギムナジウムの学生サークルで，ペテーフィが姿を現さなかったところはないといわれるほどであった。[22]

サークルでのペテーフィの朗読は，聴衆からの拍手が鳴り止まず，何度もアンコールに応えるほどの成功を収めていた。また，かれの詩はサークルの学生らのあいだでもっとも人気があり，朗読の材料に選ばれる回数は改革期を代表する大詩人ヴェレシュマルティをも上回ってトップであった。40年代なかばは，ペテーフィの人気は学生サークルの中でも圧倒的で，まさに押しも押されもせぬナンバーワンの詩人となったわけである。[23]

ペテーフィの詩作を熱心にとりあげ，朗読した学生たちは，そこにどんな新しいものを発見したのだろうか。ボドライは，ペテーフィの詩の人気を「多くの格式ばった仰々しい詩の中にあって，朗読する学生らにとってはペテーフィこそ自然で，陽気で，学生らしいユーモアにあふれ，それまでの詩人の中には求められなかった何かであった」と表現している。[24] かれの詩に描写される土のにおいを思わせる大平原の農民や貧しい庶民の姿，民話を思わせる純朴で軽快なユーモアや哀愁，また人々の感覚に直接的に訴える民謡風のリズムなどが，若い世代の感覚にすんなりと受け入れられたことは想像に難くない。また，社会変革を求める学生らにとって，ペテーフィは「ハンガリー文学の民主化」の到来を意味したと思われる。ベッシェニェイやカジンツィらの古典的啓蒙主義に端を発した近代ハンガリー文学は，新しい息吹を若い知識人に吹き込むものであったとはいえ，当初ごく限られた社会層のための貴族的文学であった。それがやがて広く中産階級の手にも行き渡り，半世紀をかけていよいよハンガリー語を話し読む者誰もが享受し共感する文学となった。学生たちが愛したペテーフィの詩は，そのように民衆化した文学の象徴だったといえるだろう。

4．演劇の民衆化

活動する詩人ペテーフィにとって，見過ごすことのできない重要な媒体の2つ目として，演劇をとりあげなければならない。ペテーフィにとっては，実は演劇こそ詩作以前に全身全霊を注いだ活動であり，役者ペテーフィの情熱なしには詩人ペテーフィは存在しなかっただろうと思われるからである。そのようなかれの活躍を見る前に，まずは啓蒙期から改革期にかけてのハンガリー語演劇の発展を振り返ってみたい。

4.1　近代ハンガリー語演劇のはじまり

啓蒙期にはじまるハンガリーの演劇運動は大きく分けて2つの要素をもっている。1つは合理性や知性，啓蒙の普及を目指した「道徳的演劇（morális színház）」の追求であり，もう1つはハンガリー民族の愛国心を覚醒させる「愛国的演劇（patrióta színház）」であった。2つは相互に関連しあい，分離できないものであるが，啓蒙時代初期の作品では前者の要素が強かったのにたいし，改革期に向かい徐々に民族的固有性・感情を強調する愛国的要素が強まっていく。[25]

演劇もまた文字媒体と同様，18世紀末まで貴族だけが楽しむことのできる娯楽であった。日常からドイツ語を生活言語とするハンガリー貴族は，ドイツ語演劇を鑑賞することができたし，ハンガリー語の演劇はまだ存在さえしなかった。また，すでに華やかな文化都市であった帝都ウィーンに比べれば，18世紀末のペシュトはまったくの田舎町であり，ドイツ語演劇にさえ常設の劇場がまだなかったくらいである。そのような中でハンガリー語の演劇を可能にしたきっかけは，やはりヨーゼフ主義政策であった。1784年にはペシュトではじめてヴォルテールの作品がハンガリー語に訳され上演されているが，ハンガリー語演劇活動の要求は，その3年後に建設された王宮劇場（Várszínház）によってますます刺

激されていく。この劇場は元来カトリックのカルメル会の教会であったのだが，カトリックの権限を大幅に規制するヨーゼフ2世によって会派は解散させられ，かれはこの教会をブダ城内の政府役人のための娯楽の場として劇場に建て替えさせたのだった。完成した3年後の1790年には，初のハンガリー語アマチュア劇団がここで上演を行っている。この年，ブダで国会が召集されるのにあわせ，カジンツィが自らの雑誌『オルフェウス』でよびかけ，実現したのである。[26]

これを機に1792年にはハンガリー語の常設劇団（Magyar Nemzeti Játékszíni Társaság）ができ，ペシュト側の河岸にあったロンデラ劇場（Rondella）で定期的に上演を開始する。演目は主にウィーンで上演されたドイツ語作品のハンガリー語訳であるが，ベッシェニェイやヴェルシェギ（Verseghy Ferenc）などハンガリーのオリジナル作品も上演した。このため，1790年代には多くのハンガリー語作品が生まれている。しかし，国からの財政援助もなく，小さな自治体や個人からの支援で続けていた劇団は持続困難になり，たった4年で解散することになった。その背景には，経済的理由だけでなく，この間起こったマルティノヴィチ事件の影響という政治的理由があることを指摘しておかねばならない。[27]

また同年，トランシルヴァニアでもアランカ（Aranka György）の提起で，ハンガリー語劇団（Erdélyi Magyar Színjátszó Társaság）が発足している。ハンガリー国内と違うのは，ここでは発足と同時に議会が劇団にトランシルヴァニア全土での公演活動を許可する決定を下すなど，ハンガリー人支配者層が劇団を保護した点である。またトランシルヴァニアの貴族ヴェッシェレーニ（Wesselényi Miklós）が自身の財産で劇団を運営し，そのため高い水準を保つことができたといわれている。[28]

ペシュトにおける2代目の劇団は1807年に結成され，8年間のあいだに上演回数は1400回，とりあげた作品数は350にのぼった。1812年にはペシュトにドイツ語劇場（Pesti Német Színház）が開設されたので，ハンガリー語劇団がドイツ語劇場を使用することを許可する訴えが国会に提出されるが，却下されている。劇団は1813年からロンデラ劇場を拠点にしたが，1815年に都市計画で劇場が壊されたのを機に，活動にも終止符が打たれた。ここでも政府の援助がないという財政問題が原因であった。[29] 8年という短い活動期間ではあったが，この劇団が文学に与えた影響は大きかった。軽快な喜劇中心の演目に，古典を重んじるカジンツィは批判的だったが，後に「バーンク・バーン（Bánk Bán）」を発表するカトナ（Katona József）にはじまり，ケルチェイ（Kölcsey Ferenc），キシュファルディ（Kisfaludy Sándor）など彼の周囲の文学者の多くが強い関心をもち，この劇場でインスピレーションを得たという。

この後，ハンガリー語の常設劇場が建設されるまでのあいだ，1820～30年代はいわゆる「旅役者時代」である。俳優と演出家らが小規模の集団を形成し，国内のさまざまな町をめぐって数週間ずつ滞在し，特設の芝居小屋で土地の人々に娯楽を提供するものである。[30] 劇場を失い，旅回り劇団という形でしかハンガリー演劇が継続できなかったこの時代を，後退の時期と考えることができるかもしれない。しかし一方で，小さな町々にまで演劇を届け，各地のさまざまな社会層の人々が役者集団の織り成す文学作品の世界にふれ，その言

語を耳にすることができた時代であったことは軽視できない。このことは否定的に解釈できないどころか，結果的には近代ハンガリー語の民衆化にとって重要な時代となったと考えてよいだろう。後で触れるペテーフィの演劇経験の原点も，実はこの旅回り劇団にある。

さて，そのような「根無し草」的な時代を経て，改革期ハンガリーの政治的要求の1つとして，ついにハンガリー語演劇のためだけの国民劇場設立が実現する（Pesti Magyar Színház, 40年からNemzeti Színház）。チェコ民族におけるブルタヴァ河沿いの国民劇場同様，この劇場の建設は近代ハンガリーの民族主義について語られる時，必ずといってよいほど言及される象徴的な出来事である。劇場は1837年に完成し，ヴェレシュマルティの作品「アールパードの覚醒（Árpád ébredése）」が柿落しとして上演された。彼自身決して劇作家ではないものの，演劇が人々の民族意識にたいして作用する絶大な力を目の当たりにし，この時期数多くの戯曲を発表するとともに，演劇の理論的研究に従事している。「栄光ある民族の過去」を強調する歴史ロマンものが観客の人気をとらえる中心的テーマであったが，やがてそれだけでなく，軽快なコメディーなども好まれるようになっていく。特にキシュファルディの作品は大変な人気であったという。[31]

4.2 ペテーフィと演劇

ハンガリーの演劇におけるペテーフィのかかわりは，作品を提供する作家としてのそれではなく，実際に舞台に立つ役者としてであった。[32] しかも主要な劇場で人気主役を演じるのではなく，ほとんどの場合脇役やせりふなしのエキストラであり，また時には俳優らの周辺で駆け回る小間使いであった。革命の寵児として国民的詩人にまで上り詰めたペテーフィには，この演劇にかんする一面は意外な感がする。しかし，子ども時代にはじまる演劇への情熱は生涯止むことはなかった。

ペテーフィの演劇へのかかわりを知るにあたっては，学校時代にさかのぼらなければならない。かれの演劇との出会いは，1837年，14歳の時であった。当時，ペシュトのギムナジウムからペシュト郊外にあるアソードのギムナジウムに転校したペテーフィは，たまたま町にやってきた旅役者劇団の上演を学校に内緒で見に行き，大変な感銘を受けたのだった。学校をやめて劇団についていこうと一大決心し，実行に移そうとするのだが，この時は先生に見つかって閉じ込められ，父親が田舎から呼び出されるという顛末に終わった。後にかれは「この地ではじめて詩を書き始め，初めて恋をし，はじめて役者になりたいと考えた」と回想している。実はこの時の女優に一目ぼれしたというエピソードが残されているのだ。[33]

その後，シェルメツのギムナジウムに移り，詩作における才能もいよいよ開花させはじめる。この学校にあった学生サークルでペテーフィが積極的な役割を担ったことは，前章ですでに触れたとおりである。しかし，演劇への情熱が捨てられないペテーフィは，16歳の時，いよいよ親に内緒で学校を中退，当時設立まもない国民劇場の舞台を踏むことをひたすら夢に見て上京した。ちょうど前年のドナウ河の洪水で大平原の両親の家が全壊し，

全財産を失うとともに一家離散というもっとも厳しい家庭状況の中で，ようやく奨学金を得て貧乏学生を続けられるようになった矢先である。金がないので，シーツ，服，本など身の回りのものすべてを売り払い，それでも足りない分をまかなうために，カトリックに改宗するため修道院に行くと2人の司祭をだまして小額を得，徒歩で首都を目指した。実際，真冬の寒さの中スロヴァキアの山中からペシュトまで歩き通したこと，華やかに成長しはじめた首都で憧れの大舞台を踏むに至ったこと，しかもそれがせりふのないエキストラであり，そのかたわら大道具役として舞台に椅子やソファを運んだり，役者たちのためにランプ持ちや食料の買出しなどをしたことなど，ペテーフィの情熱と行動力を彷彿とさせる話がたくさんある。[34] ペシュトの宿屋で父親の顔を利用してツケで宿泊し，その父親とばったり鉢合わせるが，逃げおおせたこともあった。この一件で息子が学校を中退したことを知った父親は，今度は母親を連れてふたたび上京する。いつも物静かで控えめな母の涙に説得され，この時は大平原の両親のもとに戻ることで一件落着したのだった。[35]

いよいよ本格的に役者の仕事に取り組むようになるのは，18歳の頃である。貧乏のため勉強を続けられないペテーフィは，打開策として軍隊に入るが，1年半で体を壊し，やむなく除隊する。復学の可能性を求めて，ショプロン，ポジョニを回り，ようやく西部ハンガリーの町パーパのカルヴィン派ギムナジウムに非正式な学生として入学が許可される。ここでも学生サークルに入り，後の作家ヨーカイと強い友情で結ばれたことは，すでに前章で見た。しかし，貧困は容赦なく学業を妨げ，家庭教師や詩作の懸賞金などで食いつなぐのも困難となる。やがてペテーフィは役者の仕事こそ，自分のもっとも望むことであるばかりか，最低の生活を維持する唯一の方法であると悟る。かれが選んだのは，今こそ最終的に学校を去り，小さな旅回りの劇団で大平原の町々をめぐる生活だった。

その後のペテーフィの人生は，数ヶ月，数週間のサイクルで劇団と旅をし舞台に立つもので，それは詩作が世に出た後もまだしばらく続くのである。「詩人ペテーフィ」として名が知れはじめ，文学者らとの知己から新聞の編集助手などの仕事で糧を得られるようになってからも，演劇への情熱は断たれなかった。[36]

ペテーフィが大平原の庶民の子として生まれ育ったから，また学校で詩の才能を見出され開花したからといって，それだけの経験からでは，かれの詩の簡素で生き生きとしたことばは完成されなかっただろうと思われる。学校を逃げ出し，お金も持たず歩き続けた時，旅回りの役者らと移動中，牛車の荷台で長々と揺られた時――そのような多くの時間の中で，ペテーフィは数え切れないほどの人々に出会い，かれらのことばに触れてきたにちがいない。その詩における人間の描写，そしてその手段となることばは，ハンガリー中の土を踏み歩いた体験からしか生まれえないだろう。俳優としてのペテーフィは決して才能に恵まれてはいなかったかもしれない。[37] しかし，注目すべきなのはそのような技術的問題ではなく，ペテーフィほど田舎の町から町へ芝居小屋を巡り，若い役者仲間と交流し，国の隅々まで庶民を観察して生きた詩人は近代ハンガリーの文学において他にいないという事実だろう。高尚かつ難解なヴェレシュマルティやバイザ（Bajza József）といった改革期の文学がまだ完全に庶民のレベルまで降りていなかった時に，ペテーフィはかれらのこ

とばを素手で掴み取り，吸収した。舞台上の華やかな活躍という直接的なものではなく，旅回りの芝居の経験が詩作におけることばに投影されるという，むしろ間接的な方法によって，近代ハンガリー語の民衆化過程に働きかけたというべきだろう。

5．出版の民衆化

書物にかぎらず，新聞や雑誌といった定期刊行物の発達もまた，言語の民衆化にとって大きな要因となるものである。近代言語の民衆化プロセスとして，さいごに出版という領域を検討しよう。ここでは特に，近代ハンガリーにおける新聞雑誌がどのように市民社会に浸透していったのか，そしてまたペテーフィはそれとどうかかわったのかを考えたい。

マリア・テレジア時代にはじまった出版の自由化の動きは，ヨーゼフ2世によって一気に押し進められ，検閲による発禁本の数は18世紀末には急激に減った。一般人向けの書物以上に知識人向けの学問書が規制緩和されたので，西欧の自由主義的な啓蒙書が知識人の間で公然と広まっていく。このような中，1780年代は最初のハンガリー語の新聞や雑誌が次々に誕生した時代であった。政治紙では1780年に『ハンガリー通信(Magyar Hírmondó)』がポジョニで，文学雑誌では1788年にカジンツィらの『マジャル・ムゼウム（Magyar Museum)』がカッシャで創刊され，その後も1789年にコマーロムで『総論集（Mindenes Gyűjtemény)』，1790年にはカジンツィの『オルフェウス（Orpheus)』などが次々と登場した。これらの雑誌は，西欧の思想や社会事情を伝えることでハンガリー知識人を啓蒙することを目的とし，同時にハンガリー語をより近代的で豊かなことばにしようと努めた。

しかし，それもヨーゼフ2世の死によって転換期を迎える。これらの雑誌はすべて1792年には廃刊になり，1795年にハプスブルグからのハンガリー独立を標榜するマルティノヴィチ事件が起こると，政府はさらに取り締まりを強化した。その結果，出版活動は急激に停滞する。1790年にはハンガリー国内に53件あった印刷業者が，1800年には39件に，また出版物は832種類から488種類に減った。[38]ハンガリー語の雑誌も1803年にはわずかに『マジャル・クリル（Magyar Kurir)』紙を残すのみとなった。このような衰退のもう1つの理由は，出版活動を支えた代表的な知識人の多くが1795年の独立運動にかかわって逮捕・投獄されたり，国外に亡命したことによって，世紀転換期には民族文学活動そのものが維持できないほど萎縮してしまったことによる。[39]

ほぼゼロからの出発を余儀なくされた出版活動も，しかしながら，厳しい検閲とたえずもみ合いながら，ゆっくりとした歩調でふたたび成長を始める。18世紀末には貴族や聖職者，教師，学生など，読者層がごく限られていたのが，19世紀になると教育の普及による識字率の向上，都市の経済的発展による裕福な市民層の出現，また国家の近代化事業の一環としての図書館や読書クラブ，カジノ（文学サロン的性格の娯楽場)，劇場の整備，またギムナジウムなどで発展した学生サークルなどと並行して，より広い社会層が書物や新聞雑誌を享受・消費し，民族文学活動を支えていくようになった。

こうしてハンガリー語の新聞雑誌は出版部数を徐々に回復させ，そこに新しい世代の詩人たちが発表の場を求めて集まった。サロンという人的交流を中心とした文学活動が，今

や紙面という媒体を中心的拠点とする時代を迎えたわけである。1830年代までに，新聞雑誌などの定期刊行物は，ハンガリーの精神文化生活には不可欠な位置を占めるようになった。それは，1830年に51紙まで増加した刊行物の数が，30年代の10年間だけで98紙まで飛躍的に伸びたことにも現われている。[40]

5.1 改革期の新聞雑誌

では，19世紀に入って具体的にどのような定期刊行物が出てきたのかを，文学批評雑誌を中心に主なものをとりあげてみよう。

政治紙ではまず，1806年に刊行した週2回発行の『国内通信（Hazai Tudósítások）』であろう。これはウィーンの検閲がようやく緩和に向かいつつあったこの時期，国内記事だけを扱う条件で許可されたものであるが，1808年からは『国内外通信（Hazai és Külföldi Tudósítások）』として外国の政治状況についても報道することができるようになった。付録紙は文学や言語関係の記事を掲載し，文学者らの拠点となった。はじめてペシュトで発行されたという点で，ペシュトがいよいよ政治や文化の中心地として成長しはじめたことを示す象徴的な新聞になったといえる。

これを追うように，トランシルヴァニアでもまた出版活動がはじまる。デブレンテイ（Döbrentei Gábor）による編集で1814年に出た文学批評誌『エルデーイ・ムゼウム（Erdélyi Múzeum）』は，言語改革運動を受け継ぎながらも，言語や文体の洗練を至上とするカジンツィ派の貴族的な性格にたいし，より広い市民層を文学に取り込む方向へ進んだ。特に演劇が重要な役割を果たすと考え，戯曲の公募もはじめる。

文学批評誌は次々に生まれ，女性などの購読者拡大を目指して試行錯誤を繰り返しながら，30年代にはもっとも充実した時代を迎える。1817年に刊行された月刊誌『学術論集（Tudományos Gyűjtemény）』は長期にわたり代表的な雑誌であった。特にヴェレシュマルティが編集した時代（1828-32年）は，ハンガリーにおける精神文化発展の中心的役割を果たした。付録紙『花飾り（Koszorú）』は文学小品の紹介とならんで，各地の民謡や生活習慣などを伝え，都市の市民の目を農村に向けた。これに並ぶ重要な文学誌が『アテネウム（Athenaeum）』である。文学雑誌でありながら，暗に政治的自由主義の立場を表明し，一時期は定期購読者が千人を超えたほど注目された。その他にも，キシュファルディ・カーロイ（Kisfaludy Károly, シャーンドルの弟）の『オーロラ（Aurora）』やケルチェイが活躍した『生活と文学（Élet és Literatúra）』などが読者獲得を競い合っている。

30年代になって注目されるのが，「流行紙（divatlap）」といわれるジャンルの台頭である。政治紙とも文学批評紙とも違い，流行紙は文学や演劇，音楽などの文化的な内容をより大衆的な関心を意識して編集し，国民の幅広い層への普及を目指した。「流行」という名称は，これらの新聞が最新のファッションを伝える銅板画や石版画を付録につけ，女性読者層の拡大を図ったところに由来する。流行紙は，しかし，娯楽紙という性格よりも，生活知識やさまざまな教養で読者を啓蒙する役割を果たした。市民層に文化的教養を育て，社会問題にたいする世論の形成をうながすという任務を自負し，きわめて政治的な一面が

あったのだ。これまでの文学雑誌とくらべてこれらの流行紙がはるかに大衆化し，格段広い読者層をつかんだことは，定期購読者の飛躍的な伸びを見ることでわかる。

ここでは代表的な流行紙を3つ見てみよう。まずは1842年に創刊された週2回発行の『語るペシュト流行紙（Regélő Pesti Divatlap）』である。元来『語る愛国芸術家（Regélő-Honművész）』の名前で1833年に創刊したものが，名称を変え，ヴァホト（Vahot Imre）の編集で再出発したものである。付録紙は音楽，美術，舞踊，流行の服装デザインなどを扱い，市民層の女性読者を集めた。この『語るペシュト流行紙』を継続するかたちでヴァホトが立ち上げたのが週刊紙『ペシュト流行紙（Pesti Divatlap）』である。それと同年に，これもまた改革期の大衆紙を代表する週刊紙『生活図絵（Életképek）』が創刊されている。文学作品，批評，音楽などの内容で「市民的ハンガリーの達成」を目指し，特に演劇についてさかんに議論を展開した。元来大衆的な性格をもつ流行紙であるが，40年代に入ると，これらは自由主義的な政治運動と密接なかかわりをもつようになる。当初からコッシュートらの急進的政治家を支持するなど，『ペシュト流行紙』には急進的自由主義の色彩が強かったが，『生活図絵』もまた，47年にヨーカイが編集を担当しはじめてから，内容が急激に自由主義的なものに変わり，編集部はハンガリー独立革命を標榜する若き知識人の拠点となる。

改革期の政治紙についても，簡単に触れておく必要があるだろう。『現代（Jelenkor）』（1832－48年）と『ペシュト新聞（Pesti Hírlap）』（1841－49年）の2紙がその代表的存在である。1832年に創刊された『現代』は穏健派の政治改革を代表するセーチェーニの新聞であったが，たえず厳しい検閲に苦慮し，活動を阻まれがちであった。しかし，急進派議員コッシュートが執筆した国会議事報告を掲載するなど，政治色を前面に出した同紙は，4千人を超す定期購読者を獲得するに至った。40年代に入るとコッシュートもまた検閲と闘いながら『ペシュト新聞』を始め，当初たったの60人だった定期購読者は，1844年には5千200人にまで膨らみ，最大の人気新聞となった。セーチェーニにも危機感を抱かせたほどの激しく扇動的な論調と強い反政府色のため，コッシュート自身は44年に編集長をやめさせられている。しかし，新聞は『現代』とともに厳しい検閲と闘い続けながら，48年革命まで改革の先導役であり続けた。[41]

前述の文学批評誌や流行紙をこれらの政治紙と明確に区別して考えることは，適当とはいえない。たとえばセーチェーニが『現代』の構想を温めた時，そのもっともよき理解者となり協力者となったのが詩人のキシュファルディであったし，その付録紙は一時期，文学雑誌『アテネウム』の編集長である詩人バイザが編集を担当している。また『生活図絵』を手がけた若き作家ヨーカイが，自由戦争のさなか『ペシュト新聞』の最期の編集長を務めている。1848年革命とそれに続く自由戦争の敗北の中で，これらの政治紙が廃刊になっただけでなく，すべての流行紙が同時期に消える運命にあった。政治紙は政治記事を，文学雑誌は詩や批評記事を，そして流行紙は詩や大衆的文芸記事を中心的手段にしたように，表面上の性格はさまざまであるが，いずれもがハンガリー社会をより広く巻き込んで，民族の自由と独立を求める運動の先導者となったことに相違ない。

5.2 ペテーフィと新聞

定期刊行物が本格的に文学者の活躍の場へと成長した時代，あるいは文学をかつてない広い読者層と結びつける媒体として成長する時代に，ペテーフィはそれを表現の手段として最大限に活用した最初の世代の代表的詩人であったと考えることができる。ペテーフィと新聞雑誌との関係を考えるとき，そこに作品を発表する詩人としての，そして生活の糧としてそこで働く編集者（正確には編集助手）としての2つの側面を見る必要がある。

そもそもペテーフィが詩人としての人生を歩みだすきっかけを与えたのは，文学雑誌『アテネウム』であった。詩人で秀でた編集者であったバイザや，すでにハンガリーの文壇の大御所であったヴェレシュマルティが，ここで当時20歳になろうとしていた若き詩人を発見し，その詩を初めて世に紹介したのである。しかしながら，その後ペテーフィが実際に深い関係を持つのは，むしろこの頃大きく成長を見せた流行紙の数々であったといっていいだろう。40年代の代表的な流行紙である『ペシュト流行紙』と『生活図絵』について，ペテーフィの存在を無視して語ることはできない。かれにとっては，これらの大衆紙は自分の作品を世間に伝える有効な手段であると同時に，詩作と編集の両方で食いつなぐための手段でもあり，また一面では芸術家の自由を束縛し搾取する厄介者でもあった。

貧困のため学校にも行けず，健康を害して軍隊もあきらめ，旅役者の生活も安定的収入につながらないという八方塞がりの中にいたペテーフィは，どん底の貧しさの中，ポジョニで国会議事の書記という単調でつらい仕事に疲れきっていた。そんなかれを救ったのは，『ペシュト流行紙』の編集者ヴァホト（Vahot Imre）であった。かれはヴェレシュマルティに薦められ，ペシュトにペテーフィを呼び，新聞と1年間の専属契約を結ばせるのである。こうしてヴァホトのもとで部屋と食事が与えられ，編集助手の仕事で給料を得ると同時に，毎号自作の詩を掲載し，演劇批評やその他の文学コラムを執筆することになった。新聞にはヴェレシュマルティやアラニュなどの多くの優れた作品が現われたが，なんといってもペテーフィが一番の広告塔となり，一時は定期購読者が3千人にも達した。

しかし，ほどなくして編集上のトラブルによりヴァホトと袂を分かつ。ペテーフィは，詩人が新聞にこき使われ，新聞が詩人の才能を食い物にしている現状にいらだったが，同じような不満は同世代の若い文学者らが共有するものであった。こうして1846年，ペテーフィ，ヨーカイ，トンパなど10人の若い作家が集まり，すべての新聞への作品掲載を拒否する「出版ストライキ」を起こす。いわゆる「十人会（Tízek társasága）」の発足であった。かれらの目的は自分たちが経営する新聞を立ち上げることであったが，その前に『生活図絵』が名乗りを上げ，この十人会に編集を丸投げにしたのだった。それまで比較的温和な文化紙であった同紙が，こうして革命前夜にもっとも急進的な大衆紙へと急変したことは先に触れた。ペテーフィは30篇の詩をここに発表し，革命勃発後はヨーカイとともに編集も手がけた。[42]

また，改革期の流行紙の中で，保守派を代表する『ホンデルー（Honderű）』[43]がペテーフィとのあいだにたえず起こした摩擦についても触れておこう。高貴な教養ある文学で大衆を育てることをモットーとした同紙は，ペテーフィへの人気が高まるにつれ，かれの詩を執

拗に批判するようになっていった。[44]

出版における言論の自由は，知識人全体にとって何にも増して最重要問題であった。それは，1848年にペテーフィやヨーカイを中心とするペシュトの若い革命家たちがウィーン政府につきつけた12か条の要求の中で，他の政治的諸改革の要求を先駆けて，第1条で出版の自由と検閲の廃止を求めたことに象徴的に表われている。3月15日朝のペシュトで，この要求書とペテーフィの詩「国民の歌（Nemzeti Dal）」が，ランデレル印刷所を占拠した若者たちによって検閲の許可なしに印刷され，そのビラが雨の街頭で何万人という大衆に撒かれた時，ペテーフィは民主主義と自由の到来を実感したに違いない。

6．まとめ

近代前期のハンガリーで発展した言語活動の媒体のうち，本論でとりあげた学生サークル，演劇，そして新聞雑誌のどの領域においても，その成熟しはじめた時期にペテーフィの姿を見つけることができた。それは，閉ざされた扉の向こうでひとり瞑想しペンを握る詩人の姿ではない。国中の隅から隅まで泥だらけで歩き回り，あらゆる階層のあらゆる世代の人々と出会い，舞台で台詞をしゃべり，夜な夜な新聞記事を書き続ける詩人の姿であった。このような「ひたすら活動する言語媒体」としてのペテーフィの生き方は最期まで変わることはなかった。革命勃発後，その手で武器を取り，ハンガリー独立のために国民軍の1兵士として戦ったあいだにも，かれは詩を書き続けていたのである。そして戦場の殺戮の中で露と消え，その遺体さえ戻らなかったこと――この最期が，若き情熱の詩人ペテーフィを，ハンガリーの歴史的記憶に決定的に刻みつけることになった。

近代社会と民族言語というテーマについて考えるとき，もちろんペテーフィ1人だけが近代ハンガリー語を社会に浸透させる役割を果たしたかのように語ることは，多層多様な言語の変化をあまりに単純に図式化してしまうことになるだろう。ペテーフィに先立ち啓蒙期と改革期を橋渡しする時代に活躍した詩人や劇作家たちのことばは，時代とともに発展する刊行物や演劇文化を通して，より多くの人々に伝えられていった。学生サークルのような一見閉じられた文学活動もまた，刊行物を通して社会に開かれ，つながっていた。前章までに見てきたように，これらの豊かな受け皿が準備されていなければ，近代的な言語媒体を最大限に生かしたペテーフィの活躍は生まれなかっただろう。また，文学者だけでなく，時代をリードした政治家たちも軽視できない存在である。たとえばコッシュートは数多くの新聞記事や演説を通して，つねに要点をついた激しいことばで社会改革を訴え，多大な影響力を持った。[45] ペテーフィのまわりに集まった文学仲間もまた忘れてはいけない。かれらの若さと貧乏ゆえに生まれた急進的性格が自由への希求という政治的要求に結びつき，この時急激に拡大した新聞の読者層がかれらのことばを受け止め，反応したのである。そして最後に，これらの言語媒体を活用し情報を享受した市民社会こそ近代化の産物であり，そこに生きた人々が相互に影響しながら近代ハンガリー語を社会に浸透させていったというべきであろう。詩人ペテーフィはこれらの条件が成熟した瞬間に生れ落ち，それらを十分に活かしきって活躍したという点で，近代ハンガリー語の重層的な「民

衆化」過程において象徴的な存在となり，そのことばが圧倒的な人気とともに，民衆化を大きく押し進めたといえるだろう。

---

1 ハンガリー語の nép（→ népiesedés）は「民族」「国民」「民衆」「大衆」「庶民」「人民」などさまざまに訳されうるが，本論では近代前半の貴族層から市民層へ，エリートから非エリートへ，より多くの人々に広がっていくことをさして，もっとも妥当な「民衆」を訳語にあてた。

2 文学における népiesedés の理論については，次を参照した。Horváth János, *A magyar irodalmi népiesség Faluditól Petőfiig.* 2. kiad., Akadémiai kiadó, 1978.

3 Dömötör Adrienne, A nyelvújítás. In Kiefer Ferenc (szerk.), *A magyar nyelv kézikönyve.* Akadémiai kiadó, 2003. 109-110.

4 ヨーゼフ期の啓蒙的文化政策については，山之内克子『啓蒙都市ウィーン』山川出版社　2003年を参照。

5 マリア・テレジアとヨーゼフ2世の啓蒙的絶対主義の性質を比較分析したものとして，次を参照せよ。丹後杏一『オーストリア近代国家形成史――マリア・テレジア，ヨーゼフ二世の改革とヨーゼフ主義』山川出版社　1986年，48－56頁。

6 前掲書，115頁。

7 ハンガリーでは，該当する子どもの3人に1人しか学校に通っておらず，それも農閑期に限られていた。また，国の半分は学校がない地域であった。Dobszay Tamás, Oktatás és tudomány. in *Haza és haladás.*, http://mek.oszk.hu/01900/01903/html/index7.html. また，1世紀後の19世紀末を見ても，ほぼ全員に義務教育が普及したオーストリアやチェコにたいし，ハンガリーではまだ82%の子どもしか学校に行っておらず，さらに辺境のブコヴィナでは36%，ボスニア・ヘルツェゴヴィナではたった15%にしかならなかった。イヴァン・ベレンド，ジェルジュ・ラーンキ著，柴宜弘他訳『ヨーロッパ周辺の近代1780－1914』刀水書房　1991年，68－74頁。

8 Gergely András (szerk.), *Magyarország története a 19. században.* Osiris kiadó, 2003. 173-5.

9 実際，ペシュトに移った大学ではプロテスタントの教師が採用されるようになった。啓蒙期の教育文化改革については，丹後杏一『オーストリア近代国家形成史――マリア・テレジア，ヨーゼフ二世の改革とヨーゼフ主義』山川出版社　1986年，113－124頁，ならびにH. バラージュ・エーヴァ著，渡邊昭子・岩崎周一訳『ハプスブルグとハンガリー』成文社　2003年，218-223頁を参照。

10 ドイツ化政策の具体的な内容には，丹後杏一『オーストリア近代国家形成史――マリア・テレジア，ヨーゼフ二世の改革とヨーゼフ主義』山川出版社　1986年，124－140頁。

11 丹後杏一『ハプスブルグ帝国の近代化とヨーゼフ主義』多賀出版　1997年，286-8頁。

12 1846年にはハンガリー国内だけで102校，トランシルヴァニアで20校のギムナジウムが運営されていた。学校数の増加にもかかわらず，生徒の数はどこも非常に多く，現場はかなりのマスプロ教育であったといわれている。また，中等教育に進めたのは男子だけであり，女子は初等教育までしか受けられなかった。（Kósa László (szerk.), *Magyar művelődéstörténet.* 2. kiad. Osiris kiadó, 2000. 346－7.）

13 Mészáros István, Bevezetés a középfokú oktatás történetébe. in Gazda István (szerk.), *Fejezetek a magyar művelődéstörténet forrásaiból.* Tátogató kiadó, 1996. 177－180.

14 Gergely András (szerk.), *op. cit.*, 163－166.

15 改革期における文法・語彙の領域別整備については，Kovalovszky Miklós, Tudományos nyelvünk alakulása. In Pais Dezső (szerk.), *Nyelvünk a reformkorban.* Akadémiai kiadó, 1955 を参照。

16 本論では，1784年のドイツ語公用語化については「言語令」，1844年のハンガリー語の公用語化については「言語法」という表現を用いた。この表現の使い分けは，前者が君主による専制的な法令として発布された命令であるのにたいし，後者が議会の決議による法律の制定であるという両者の性格の違いによる。

17 ハンガリー人政治家らのハンガリー化政策にかかわる考え方については，パムレーニ・エルヴィン著，田代文雄・鹿島正裕訳『ハンガリー史1』恒文社　1980年，289－295頁を参照。

18 Bodolay Géza, *Irodalmi diáktársaságok*. Akadémiai kiadó, 1963. 28.

19 ケストヘイのフェシュテティチ家（Festetics），トランシルヴァニアのテレキ家（Teleki），またはハンガリー随一の大貴族セーチェーニ（Széchenyi）などの私蔵図書コレクションが代表的である。マロシュヴァーシャールヘイ（現ルーマニアのトゥルグ・ムレシュ）のテレキ図書館の蔵書はハンガリー学術協会の基礎となったし，セーチェーニ・コレクションからは現在も国内最大で中心的な国立セーチェーニ図書館ができた。（Csapodi Csaba, A régi magyar könyvtárak. in Gazda István (szerk.), *Fejezetek a magyar művelődéstörténet forrásaiból*. 432－33.）

20 Bodolay Géza, *op. cit.*, 681－683.

21 *Ibid.*, 64－65.

22 *Ibid.*, 233－250.

23 *Ibid.*, 452－454.

24 *Ibid.*, 454.

25 Pándi Pál (szerk.), *Magyar irodalom története*. 1965. 74.

26 Székely György (szerk.), *Magyar színházművészeti lexikon*. Akadémiai kiadó, 1994. 847－8.

27 Pándi Pál (szerk.), *op. cit.*, 73－76.

28 *Ibid.*, 196－9.

29 ペシュトのドイツ語劇場はメッテルニヒによっても支援され，ヨーロッパの水準にまで高められている。しかしその後，ドイツ語劇場も19世紀の民族主義的潮流の中で厳しい運命にさらされる。革命前夜の1847年に火事で崩壊し，王宮劇場が再びドイツ語演劇の場となったが，「妥協」以降，1870年には首都で常設のドイツ語劇場を運営することが国会の決議で禁止される。（*Magyar színházművészeti lexikon*, 552.）

30 Pándi Pál (szerk.), *op. cit.*, 198.

31 Lóránt Czigány, *The Oxford History of Hungarian Literature*. Oxford UP. 1984, pp.142－145.

32 ペテーフィには唯一の劇作として「トラとハイエナ（Tigris és hiéna）」（1846年）があるが，かれの創作活動全体からみた劇作の重要性はごくわずかといわざるをえない。

33 Kerényi Ferenc, *Petőfi Sándor, élete és kora 1823－1849*. Unikornis kiadó, 1998. 19.

34 *Ibid.*, 22-3.

35 Illyés Gyula, *Petőfi Sándor*. Móra könyvkiadó, 1989. 40－42.

36 この頃のペテーフィの演劇への思い入れとかかわり方は，友人や文学者らとやりとりした書簡の数々から見て取ることができる。たとえば，雑誌『アテネウム』に初めて作品が公表され，詩人としての第一歩を踏み出した20歳のころ，すでに学業をやめ，旅回り劇団に入っていたペテーフィは，編集者バイザに対して自分の詩が掲載された号をぜひ送ってほしいと懇願するが，その理由を，劇団の仲間が自分が雑誌に詩が掲載されたペテーフィであることを信じようとしないからだと説明している。その中で，役者としての自分を「まだたいしたものではないけれど，目に見える進歩はある。すでに僕は何回か観客の目をひきつけて拍手をもらった。これは4ヶ月にしかならない俳優にはもうしぶんないことです…（中略）…僕ががんばったおかげで「リア王」を演じられることになりました。僕は道化の役をします」（1843年3月14日付）と無邪気かつ誇らしげに語っている。

また，その後ポジョニで生活のため国会の議事録執筆の仕事を請負い，わずかな報酬で生活する日々について，同じくバイザに宛て次のようにこぼしている。「こんな状況ならよろこんでポジョニを後にして，どんな劇団でもいいから探したい。とにかく時間を浪費しないために。このままでは，——僕は乞食だ！」（1843年6月1日付）

その後も仕事が途切れて生活に困窮すると，地方の劇団を訪ね，役者の仕事を探すことがあった。（Dr. Badics Ferenc, *Petőfi levelei*. Anno kiadó, 1997. 16－18.）

37 ペテーフィの役者としての資質については，これまで多くの議論があった。友人らの記録からは，かれが決して才能に恵まれた俳優ではなかったことがうかがえる。ヨーカイはケチケメートでかれの舞台を何度も見ているが，後にその時のペテーフィについて，若い親友間の親しみをこめて

次のように書いている。「舞台こそかれの夢で，シェイクスピアこそかれの理想だった。しかし，声も容姿も舞台向きではなかった。弱々しく痩せた顔はたえず拭うことのできない片意地な表情をして，いかなるニュアンスも表現できなかった。まとめようのない黒い髪は空に向かってそびえていた。…(中略)…笑い方はまるで苦しんでいる人のようで，笑い声もそうだった。笑うと出歯でとがった歯が見え，顔になにか悪魔的な表情を与えた。かれを怒らせると，いつもこの歯で僕の頭を噛むのだった。」(Illyés Gyula, *op. cit.*, 80－81.)

38 Mérei Gyula (szerk.), *Magyarország története 1790－1848*, Akadémiai kiadó, 1980. 1060.

39 マルティノヴィチ事件とハンガリー知識人とのかかわりについては，岡本真理「民族語の夜明け---近代東欧の言語改革」大津留厚他著『民族』近代ヨーロッパの探求⑩ミネルヴァ書房，2003年および Boreczky Beatrix, *A magyar jakobinusok*, Gondolat, 1977 を参照。

40 Buzinkai Géza, *Kis magyar sajtótörténet*. 1993.
http://www.mek.iif.hu/porta/szint/tarsad/konyvtar/tortenet/buzinkay/sajtot. htm

41 コッシュートと検閲との熾烈な闘いは，『ペシュト新聞』以前にかれが手がけた手書きの新聞『国会通信 (Országgyűlési Tudósítások)』(1832－36) において，より鮮明に認められる。手書きの出版物には検閲の手が入らなかったため，自由な言論を実現させようとコッシュートが考えだした方法だった。法学部の貧乏学生25人が原稿を手書きで写すことからはじまり，その数は後に40人程度まで増えた。その後，石版印刷機を購入し印刷をはじめたが，とたんに検閲にひっかかり廃止に追い込まれた。しかし，それもつかの間，手書き新聞のアイデアは『立法府通信 (Törvényhatósági Tudósítások)』として再び息を吹き返し，購読者数は160まで伸びた。翌年にコッシュートは皇帝を侮辱した罪で3年の懲役となり，新聞は廃刊に追い込まれた。(Buzinkai, *op.cit.*)

42 Kókai György, Sajtótörténet. in Gazda István (szerk.) *Fejezetek a magyar művelődéstörténet forrásaiból*. 395.

43 「ホンデルー (Honderű)」とは改革期の造語で「明るい祖国」の意味。セーチェーニが首都の名にふさわしい語として提唱したのがはじまりとされる。ちなみに現在のハンガリーの首都「ブダペシュト」の名もセーチェーニの造語である。ペシュトとブダの2つの町として「ペシュト・ブダ (Pest-Buda)」と呼ばれていたのが，1872年に統一されブダペシュトに名称変更された。

44 ペテーフィの詩を「そもそもことば全体が詩的でないし，気品がない。ぶしつけ極まる」と批判する『ホンデルー』にたいし，ペテーフィは同紙を「ケチケメートの市場を飛び回るハエだ」と悪態をついている。(Kerényi Ferenc, *op. cit.*, 61.)

45 「コッシュートが新聞に書いた見出しは，かれの演説以上に読者を呪文にかけ，かれの指導的役割のもっとも重要な手段となった。見出しにはコッシュートの作家としての圧倒的な個性が表われていた。時にはドライで正確なリアリズムで描き，時には聖書的受難という高みから自身の正義というものを轟かせたのだが――いつも挑発的でいつも説得力があった。」(Szerb Antal, *Magyar irodalomtörténet*, 11. kiad. Magvető, 307.)

(2005．1．7受理)